# 新たな偕行社の発足に際して

家族会員　大野　敏明

偕行社が陸修偕行社として新たに再出発するという。私は帝国陸軍に在籍したこともなく、陸上自衛官であったこともないが、家族会員として、会員とりわけ陸自OBの新たな会員のみなさんに伝えたいことがある。

私の曾祖父は明治6年に陸軍に入り、明治10年の西南戦争に近衛の将校として出陣した。同年に発足した偕行社の最初の会員のひとりでもある。その弟は旧陸士8期、日露戦争では金沢（後に富山）の第9師団歩兵第35聯隊第1大隊長として出征、旅順の盤龍山攻撃で戦死した。そのまた弟は海兵16期、大正6年、海軍少将で退役した。

私の祖父は陸軍中央幼年学校予科8期、中幼本科8期、陸士23期、陸大30期、山東出兵、シナ事変、張鼓峯事件に出て、陸軍少将で退役、終戦時は応召で大阪陸軍幼年学校長を務めた。

その次弟は陸士28期、山砲兵第41聯隊長としてニューギニアで終戦を迎えた。三弟は中幼予科15期、中幼本科15期、陸士30期。昭和17年11月、独立速射砲大隊長としてガダルカナル島で切腹・戦死した。

私の父は陸士55期、終戦時スマトラで近衛捜索聯隊第3中隊長、大尉であった。その弟は同じく56期、終戦時は座間の陸士の区隊長、大尉であった。そのまた弟は海兵74期、回天乗組、海軍少尉で終戦。

父の従弟に陸士に進んだものもおり、それぞれの妻の実家などにも多くの軍人がいる。

我が家は曾祖父が偕行社の会員になってから終戦まで途絶えることなく会員であり、昭和27年の偕行社復活時には祖父とその弟、父とその弟が会員となった。父は平成19年に亡くなったことから、父の同期生などが私に家族会員になることを勧め、私もこれにしたがって、家族会員としてこれまで16年間、各種行事に参加するなどしてきた。いってみれば明治10年から令和5年の現在まで、継続して会員であったわけで、こうした家はそう多くはないであろう。

私自身は自衛官ではないが、防衛研究所第44期一般課程に在籍し、統合幕僚学校統合高級課程の第1期から現在に至るまで17年間、部外講師を務め、陸自幹部学校、現教育研究本部指揮幕僚課程（CGS）においても54期以降、13年間、部外講師を務めている。

防研同期はもちろん、統合高級課

程、CGSあるいはTACの多くの学生とも昵懇になり、防大1期以降の知り合いも100人以上にはなるだろう。

こうした人々と懇談し、時に議論して考えるのは、防大1期以降の陸上自衛官の旧軍に対する意識の大きな差である。

ある防大1期の元将官は旧軍とくに陸軍こそが諸悪の根源であり、開戦に導いた責任はもとより、戦争指導の拙劣さ、終戦時の混乱、満洲、樺太方面での邦人の悲惨な状況を生んだ元凶として、厳しく指弾する。そして、我々戦後の自衛隊は旧軍とは関係のない、まったく新しい民主的、合理的な軍であると主張する。

また別の防大シングル期の元将官は、国民が旧軍と自衛隊を混同するため、自衛隊への支持が得られず、本来の防衛任務に支障をきたしているという意味からも、旧軍との絶縁の必要性を強調する。さらに別の防大20期代の元将官は、天皇は日本の安全保障に何の寄与もしておらず、皇室が存在することに合理性がなく、旧軍の尊皇体質に問題があると言ってのけた。

総じてこれらの人々は大東亜戦争に否定的であり、陸軍士官学校、幼年学校にも否定的であり、陸上自衛隊が陸軍の後輩であることを全面的に拒否している。

確かに旧軍は大東亜戦争を戦い、敗北した。この敗北とその後の米国による占領・支配の屈辱はぬぐいがたいものであり、いまだにわれわれ日本人を混乱に陥れている。

現代において戦争は起こしてはならない、いやあってはならないものとして認識されており、戦争を防ぐための防衛力強化が叫ばれてきた。こうした観点からすれば、満洲事変、シナ事変、大東亜戦争を起こし、かつ悲惨な敗北を喫し、現在に至るまでの戦後の思想的混乱を引き起こした元凶として陸軍を全面否定する感情を持つことは理解できなくもない。しかし、明治維新以降、近代国家としてスタートした日本が世界列強のなかで伍していくための労苦は決して小さいものではなかった。その最大のものは治外法権と関税自主権の問題であったろう。幕末、治外法権を認め、関税自主権を失ったことは、これまた屈辱的であり、独立国家とは言い難い状況を現出した。明治時代の外務省の仕事は治外法権の撤廃と関税自主権の回復のみにあったといっても過言ではない。現にこの問題が解決した後の外務省は腑抜けのようになり、現在にいたるまで外交の主導権を国内的にも国際的にもとれていない。

この状況を打ち破ったのは日清、日露戦争の戦勝である。治外法権は日清戦争開始の年に撤廃されたが、関税自主権は回復されぬままであった。

明治37年、日露戦争勃発するや、列強は多くの観戦武官を送り込んだ。ダグラス・マッカーサーの父、アーサー・マッカーサーも観戦武官として満洲に赴いている。

日露戦争における陸海軍の奮戦は世界の観戦武官をうならせ、賞賛を受けた。日本は世界最強ともいわれたロシア軍を陸海で打ち破った。戦後の列強は日本を同等の近代国家として認め、明治44年、関税自主権は回復された。日露戦争の戦勝がしからしめたことは言を俟たない。

繰り返すが、幕末以来の国家最大の懸案の解決は日清、日露の戦いで多くの将兵が命をかけた結果得られたものである。まさに陸海軍の奮戦によって日本は独立国家として世界に認知されたのである。

その後も北清事変における柴五郎中佐の邦人をふくむ列強各国の民間人保護、国内的には必ずしも十全な評価を得ているとはいえないが、第1次世界大戦での海軍の地中海での活躍、青島での陸軍の活動は連合国から賞賛を得、日本陸海軍はきわめて高い評価を得た。大正9年に発足した国際連盟において常任理事国となったのはこうした働きがあったればこそである。

その後の陸海軍の歩みはご承知の通りで、大東亜戦争の敗北につながっていくのだが、明治維新以来の輝かしい戦勲は忘れ去られていいものではない。いや、しっかり記憶されて讃えられるべき性格のものである。それを大東亜戦争の結果のみを見て、陸軍を非難し、陸軍との違いのみを希求するのは、近代独立国家となるために戦った将兵への冒涜につながりかねない。

翻って海上自衛隊はどうであろうか。海軍も大東亜戦争敗北の責任を大きく負うことは言を要しない。海軍も終戦によって解体されたが、戦後の復員船の運航は旧海軍の軍艦や米軍貸与のLSTなどによって行わ

れ、機雷除去を目的とした掃海部隊も温存され、組織的な継続性を保つことができた。そして終戦の翌年には海上保安庁が発足し、旧海軍軍人が横滑り的に移動したことにより、海軍との一体性が担保され、それが後の海上警備隊、さらには海上自衛隊へと移行していくのである。

海軍は技術者集団であるから、このような継続性が維持されたのであろうが、それだけではなく、ひとりひとりの旧海軍士官が、その精神、文化を維持、発展させることの重要性を認識していたことが大きいと思われる。明治以来の海軍の伝統や精神は現在もそのまま海上自衛隊に引き継がれており、水交会も海兵OBから海自OBに自然に移行している。彼らは東郷平八郎元帥、山本五十六元帥を、いまなお大先輩として尊敬している。

陸軍は終戦による解体から警察予備隊の創設まで5年間のブランクがあり、しかも警察予備隊設立当初は旧軍将校の参加は認められず、現在の連隊長レベルの指揮官を元下士官らが担った時期があった。こうしたいびつな状況が完全に解除されるのは昭和27年の独立回復後である。この断絶が現在に至るまで、旧軍と陸自の問題として残っている。

陸軍は昭和に入って大きな過ちを犯した。それは確かである。勝てぬ戦争をしたこと、そして敗北し、大日本帝国が滅んだことはその最たるものである。しかし、だからといって明治維新以降の功績を忘れ去っていいのであろうか。また、昭和の戦争において国に殉じた陸軍将兵への感謝、慰霊、鎮魂を忘れていいのであろうか。現代において陸軍の功績を正面から評価し、顕彰する組織は偕行社を置いて他にない。

陸修偕行社となることで、旧軍との関係を断絶するようなことになるのは許されない。

陸上自衛隊のみが陸軍を正当に評価し得る立場にいる。反省すべきは反省し、顕彰すべきは顕彰して、われわれの父祖が残した遺産を引き継いでいくことこそが、これまでもこれからも偕行社に与えられた使命だと信じる。明治以来の陸軍の顕彰を抜きにして、陸上自衛隊の展望も発展もない。

（元産経新聞編集局編集長）